

主の誕生（夜半）

2013.12.24 18:00 ミサ

オリビエ・シェガレ

（パリミッション会司祭）

ルカ 2・1-14

今年も皆でクリスマスをお祝いしています。キリスト教国ではなく、イエスがほぼ不在である日本のクリスマスなのに、その絶えることのない人気の秘訣は一体どこにあるかといつも疑問に思っています。人類学の視点から日本人はお祭りが好きという説が出たりするが、それがあるかもしれません。日本人は宗教の内容とはあまり関係なく、何であれ、お祭りの気分を味わいたがり、日常の煩わしさを忘れ、皆と一緒に一体感を楽しみたい、と。しかしクリスマスの人気を支えているのは、それだけではないと私は思います。皆が疲れはてている競争の激しい見栄の張る社会の中であって、クリスマスの馬小屋にある飾りのない素朴な環境、そこに溢れる家族の愛情の豊かさ、その優しさと平和の雰囲気、心が捉えられているのではないのでしょうか。物質的な繁栄だけに満たされ得ない現代の人々は、一人の小さい命の誕生を迎えようとしている貧しい羊飼いの心の豊かさや彼らの純粋な喜びに心が動かされているに違いありません。多くの方は、クリスマスを通して、イエスの出来事そのものを祝うよりも、2000年の間に形成されたクリスマスの文化の暖かさを求めているでしょう。こうした意味で捉えたクリスマスは物足りないという批判もあるが、私としてはクリスマスがキリスト教を知らない人を含めて、宗教としてではなくても、世界の人々が共有できる文化になったことを喜ぶべきことだと思います。生命のたくましさを感じさせるもみの木、永遠の光りへの憧れを呼び覚ます星、故郷の暖かさを思い出させる素朴な馬小屋、人の心に喜びを誘うようなあどけないキャロルなど、イエスの誕生という出来事は、こういったような豊かなクリスマスの伝統によって生かされています。そしてこの伝統の担い手はインテリや指導的なエリートではなく、社会の中心から周辺に追いやられた貧しい人々、土を耕す農民、家畜を飼う遊牧民、下町の庶民、森の中に生きる少数民族の人々であったこ

とを忘れてはいけません。残念ながら現代社会の中で、クリスマスの人気を支えてきたこうした文化は、次第にイエスの誕生の出来事から切り離され、商業的な目的のために利用されてきました。そのためかクリスマスは、生命の神秘や優しい連帯と平和の感覚が薄れてしまい、その逆の資本主義のシンボルとでも言えるようなものになってしまった。町に輝く人工的な星は目をくらむほど眩しいが、心に届くような光ではない。デパートに流れるクリスマスキャロルはバックグランドミュージックの一部となってしまう、心に入っていない。繁華街に蔓延っているサンタクロースは皆同じような顔に見えてしまい、子供の目を引くことはもうありません。人々の心を豊にするはずのクリスマスのお祝いは一体どこに行ってしまったのだろうか。そして救い主を信じて、イエスの誕生を教会でお祝いする私たちは、クリスマスの本来の姿を町の中で取り戻すことは私たちの使命ですが、その方法はないでしょうか。

一つの方法は町の交差点や広場でクリスマスのキリスト教的な意味をしつこくやかましく説教すること。クリスマスが近づくと、新宿や渋谷、大きな繁華街で、某キリスト教団体はスピーカーを通して、あらかじめ録音されたテープの説教を流しています。説教よりも脅しと言ってよいでしょう。「時が近づき、主の裁きが迫っています。罪を反省して回心しなさい。悔い改めないと永遠の地獄に入ります」と。正直言ってこのような布教の方法は耐えられなくて、クリスマスが近づくと私は新宿や渋谷に接近しないようにしていますが、反発を感じるのは私だけではないでしょう。買い物をしながらクリスマスのムードを楽しもうとして説教を聞きたくない人々の気持ちを考えないのか。そういうような布教のあり方はあまりにも一方的で、人の神経を疲れさせ、心を傷つけるだけであって、福音宣教どころか、その反対だと思います。

もう一つの方法は、クリスマスの歓びを皆と分かち合いながら、説教ではなくて、身をもって慈しみと平和の福音を示すことです。数ヶ月前に学生と一緒に1947年のアメリカの古い映画「34丁目の奇跡」を再び見て、ヒントを得たような気がしました。舞台はニューヨークです。デパートのクリスマス商戦の時期にサンタクロース役として雇われたある老人が、自分は本物のサンタクロースでありたいと言い出

して、大騒ぎとなる。彼はデパートの方針作戦であったはずの強引な売り込みをせず、一人一人の子供を呼び抱きしめて、欲しい物は何ですかと聞く。欲しいものが自分が雇われたデパートになれば、それを売っている隣のデパートを紹介する。やがて競争の原則を破るような老人のこうした振る舞いが上役に密告される。老人が訴えられて、裁判沙汰になるが、町の子供たちはサンタを応援して、励ましの手紙を山ほどに送ります。それを聞いて感動した裁判官は老人の無罪を言い渡す。老人の小さな親切を通して、イエスの誕生の愛のメッセージが子供たちに伝わってきたことは、クリスマスの真の奇跡であったと認めたからです。

現代の人々に本物のクリスマスの意味を伝えるには、説教ではなく、クリスマスの世俗化の非難でもなく、一緒にクリスマスをお祝しながら、今日誕生してくる救い主の優しさを、身をもって示すことです。数年前、板橋区ある教会で働いていた時、近所にあったお寺のお坊さんからお寺の縁がある商店街で、信者をつれてクリスマスのキャロルを歌うよう頼まれたことを思い出します。半日いっぱい歌ったが、通っていた人は何人か私たちのグループに加わり「グローーーリア」を歌い始めて、皆が握手して喜んでくれました。忘れられないクリスマスの一つです。映画のサンタのように、お寺のお坊さんのように、私たちも家庭なり、職場なり、地域なり、回りにいる人々に、クリスマスの喜び、神様の無償の愛を伝えることができれば幸いです。毎日クリスマスであればいいなという人もいますが、せめて今日の晩と明日に、出会った一人一人の人に優しい声をかけ、暖かい微笑みを向け、クリスマスの平和の本当の意味を伝えることができますように。